屋を恥ずかしく思うのも自然な流れかもしれません．

日本も茅葺どころか瓦の家も少なくなり，和服を着ている人も稀です．変化はどの地域にも起きています．よってアカの人たちの変化について私が口を挟むべきではないし，また正しいもしくは間違っているという判断が出来るものでもないと考えます．これからもアカの人たちは村ごとに日にちが異なる正月を祝い続けるでしょう．祝う気持ちや習慣が残れば見かけにこだわる必要はないとも思います．しかし餅搗きの様子に私が郷愁を覚えたのは事実であり，彼らの伝統的な衣食住が無くなっていくのを悲しいとどうしても思ってしまいます．

「電話彼氏」を婿にする

──ウズベキスタンの結婚事情──

宗　野　ふもと*

ある日，ホームステイ先の住み込みお手伝いの娘ハフィザを訪ねてくる夫婦があった．2人は「ソウチ」で，ハフィザを息子の嫁にと，訪ねてきたらしい．ソウチとは花婿候補側の人間で，花嫁候補の両親に会い結婚を申し込む役目を担っている．今回のように両親である必要は特になくて，親戚や友だちがソウチとなることもある．ウズベキスタンでは，結婚話は恋愛結婚であれ見合い結婚であれ，ソウチが花嫁候補のもとを訪ねて結婚を申し込み，それを花嫁候補の両親が承諾してからでないと具体化しない．その日偶然訪ねてきていた親戚が，ハフィザにソウチが来たことを知ると，なんともいえないニヤニヤした表情を浮かべて，「あらまあ，むふふ，一番いいことが起きたのね」と私に目配せをしてきた．そもそもその夫婦がなんのためにハフィザを訪ねてきたのか事情を飲み込めていなかった私は，その時は親戚の表情の怪しさも，目配せの意味も，何もわからなかったのだが．

ハフィザは25歳．調査地では20歳前後で多くの娘には結婚話が持ち上がり，遅かれ早かれ嫁いでいく．25歳というと十分臺が立った年齢なので，なかなか花婿もみつかりにくい．彼女の父親が「あまり話が通じない」人物だったことと，数年前に母親を亡くしていたために，結婚話がなかなか具体化しなかった事情があるらしい．父親が述べたような人物であるために，親戚でもある住み込み先の主人がハフィザの父親に代

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　ホームステイ先の夫婦（左）とソウチ夫婦（右）

写真 2　電話をするハフィザ（右）
（石村育美氏撮影）

わってソウチの申し入れを受けた．その日，彼女の少し遅めの結婚話の浮上に，終始周囲は喜びで沸いていた．

結婚相手は「電話彼氏」

ハフィザには，会ったことのない「電話彼氏」がいることは知っていた．毎晩遅くまで誰かと電話で話していたし，ソウチが来る少し前に，ハフィザから「電話彼氏」と喧嘩をして彼が電話に出てくれなくなったことの相談をうけていたから．今回のソウチはやはり「電話彼氏」の両親だった．ハフィザはケンカなどしながらも，会ったこともない相手と結婚話が出るほどに電話ひとつで愛を育んでいたのだ．しかし驚いたのは，実は今回のソウチは先日ケンカをした「電話彼氏」の両親ではなく，その彼の友だちの両親だったことである．ということは，ハフィザには少なくとも「電話彼氏」が 2 人いたということになる．2 人の「電話彼氏」はお互い友だちなので，今回の一方の「電話彼氏」によるハフィザへのソウチ派遣で，2 人の仲は気まず

写真 3　ハフィザと「電話彼氏」の初対面の場面

くなったらしい．そのことをハフィザは少し煩わしげに私に話してくれた．その話を聞いて，私はあっけにとられた．なんて大胆なんだろう，ハフィザ，と．その後，「電話彼氏」たちの仲が修復されたのかどうか，私は知らない．ハフィザが彼らの不仲を私に話してくれたのはこれっきりだったし，そのあと彼女は結婚準備に翻弄されて，きっと疲れてしまったのだろう，しまいには「彼のことが好きかどうかわからない」と漏らすようにな

り，私はなんとなくその後の様子を聞きにくくなってしまったのだ．それでも，ソウチが来てから半年後，彼女は幸せそうに，でも少し不安そうに「遠いけれど，（ガスや電気，水の）環境があるところ」へ無事に嫁いでいった．ハフィザの結婚に関して，私にしてみればいろいろと不思議なことはあったけれど，ここでは，結婚とはそういうものなのかもしれない．

「電話彼氏」のみつけ方

ハフィザが「電話彼氏」たちと付き合い出したのは，彼女の友だちがハフィザに彼らの携帯電話の番号を教えたのがきっかけだった．ウズベキスタンでは，近年急速に携帯電話は普及していて，現在では国民の 70%が所持しているという説もあるほど．近頃では，ハフィザのように携帯電話を介して結婚相手をみつけたり，携帯電話は交際から結婚に至るまでの関係維持のためにとても重要なツールとして位置づけられていたりして，出会いを求める若者の心を魅了しているようにみえる．ハフィザだけではなく，ホームステイ先に併設されていた織物工房に働きに来ていた 20 歳前後の娘たちは携帯電話に皆夢中だった．彼女たちにとって欲しいものは何を差し置いても携帯電話だったし，給料を貯めて念願の携帯電話をもてば，「電話彼氏」を必ずといっていいほどつくっておしゃべりを楽しむのだった．工房で働く娘のノディラは，念願の携帯電話を手にすると，早速織り子仲間のサンタから「電話彼氏」を紹介してもらい，彼とのおしゃべりを日々楽しんでいた．「どのような人なのか，その男は」と私が尋ねると，「隣り村に住んでいて，とても頭のいい人」と答えた．のろける彼女は，日本でもみたことがあるような女の子の顔で，ほほえましかった．

友だちから電話番号を手に入れるのが，「電話彼氏／彼女」の王道的みつけ方らしい．この他に，若い男性は，定期市（バザール）の携帯電話料金の支払い所で番号を大量に入手して，若い娘が出るまでひたすら電話をかけ続けることもある．若者にかぎらず，ウズベキスタンの人々は自分の携帯電話の番号を見ず知らずの人間に教えることや，自分の番号が勝手に誰かに知られることについてほとんど抵抗がない．むしろ，「なにかあった時のために」といって，多くの人の番号を手に入れてなにかの時のために備えることに余念がない．こうした事情が背景にあって，出会いを求めて電話をかけ続ける若者の手当たり次第的行動も許容されているようだ．料金支払い所には，入金先の携帯電話の番号が記入されたノートがある．番号の入手方法に関して私は知る由もないが，彼らはここから大量に番号を手に入れて，若い娘に当たるまでひたすら電話をかけ続けているらしい．娘が電話に出れば，あとは会話をがんばってその娘と電話の付き合いを続けるのもいいし，娘の友だちを紹介してもらってもいい．芋づる式に出会いは広がっていくのである．

娘たちにとっての「電話彼氏」

携帯電話を使って見ず知らずの異性と知り合い，何人もの「電話彼氏」とおしゃべり

を楽しんでいる娘たちだけれど，彼女たちは「娘らしさ」をめぐるさまざまな性規範のもとで日々を生きている．ウズベキスタンでは，婚前交渉はもってのほかだし，結婚前に親族以外の男性と一緒にいるところを誰かに目撃されれば，「あの娘はフラフラしている」という噂がたちまち流れ，その娘の評判はガタ落ち，結婚話は遠のく．「女性は独立しては生きていけない．だから，結婚しなければいけない」という言葉を調査中に何度聞いたことか．結婚適齢期を迎えた娘たちにとって，そして彼女らの両親にとって，婚期を逃してしまうことへの恐れは強い．だから彼女たちがどこの誰かもわからない「電話彼氏」と会うことはハフィザのように結婚話が具体化しない限り，絶対にない．

ハフィザのように「電話彼氏」と結婚にまで至った話は，調査中にちらほら聞いていたものの，一般的ではないし，親がみつけてきた相手との結婚がやはり多い．「電話彼氏」との結婚の望みは薄いけれど，それでも娘たちは彼らとのおしゃべりをやめない．見ず知らずの若い男から電話がかかってくると，適当に嘘をつきながらも，楽しそうに笑っておしゃべりを続ける娘たち．時には隣にいる私のことを話題に上げて，話をしろと携帯電話を私に突き出してくることもあった．私は何を話せばいいかわからないし，話すこともないので無言で娘に電話を突き返すと，とても不思議そうな顔をして「何で何も話さないの？」と彼女たちは言う．会ったこともない「電話彼氏」とおしゃべりすることに全く抵抗がない彼女たちに，私は苦笑いをするしか

写真 4　結婚後ホームステイ先に遊びにきたハフィザ（中央）

なかった．彼女たちが彼らとおしゃべりを続ける理由，それは淡々と過ぎていく村の生活のなかで「電話彼氏」が外の世界への広がりを垣間みせてくれる数少ない存在だからなのだろう．それから多分，「もしかしたら，もしかしたら，ハフィザのようなこともあるかもしれない，もしかしたら…」と，自分の生活がガラリと変わるかもしれないというドキドキ感をもち続けて，日々を過ごしていたいからなのだろう，と思う．

嫁いでいったハフィザの携帯電話にある日電話をかけてみた．彼女の嫁ぎ先の近くまで行くことがあったから久しぶりに会いたくなったのだ．でも，何度かけても電話は通じなかった．後日ホームステイ先に訪ねてきたハフィザは言った「今は私には携帯電話は必要ない．義理の父の電話があればいいでしょう．だからお義父さんの方に電話してみて，フモト姉さん．絶対に遊びに来て．私たちは，いつでも待っているから」．ハフィザが娘から花嫁に，そして妻になったことを知った瞬間だった．